

博士論文の要旨および 論文審査結果

氏名	中村 史
学位の種類	博士（比較文化学）
学位記番号	文博乙第1号
学位授与の日付	2006年3月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	ジャータカ説話の原型と展開
論文審査委員	主査 小林信彦 教授 副査 米山喜晟 教授 副査 梅山秀幸 教授

<博士論文の要旨>

ジャータカ説話の原型と展開

中 村 史

第一章 『三宝絵』とその本生譚

この章では、日本の平安時代・永観二年（九八四）成立の説話集『三宝絵』がどのような作品であるかという記述に筆を費やしている。本論文・第二章以下で取り上げるのは『三宝絵』の本生譚である。これらは素朴な

ものでありながら、ともかくも日本文学に流れこんだ最古の、あるいは最もまとまった数の本生譚である。

第二章 シビ王本生譚の原型と展開——「鷹と鴿」型の場合——

「布施波羅蜜」（究極の布施）を説く説話として『三宝絵』に入ったシビ王本生譚（「鷹と鴿」型）は、「布施」の説話として名高い。しかしこれは本来「求法」（仏教の教えを求める）の説話であり、また、さらに原型をたどれば、ヒンドゥー教の世界において人民・生物を守護する「王の務め」を説く説話であった。

第三章 シビ王本生譚の主題とその達成

『三宝絵』のシビ王本生譚（「鷹と鴿」型）を、話型のみならず文章（表現）のレベルでも見る。ヒンドゥー教世界において「王の務め」という本来の主題を持っていたこの説話が、仏教において「求法」「布施」を説くべく転用されていったとき、そのことによるひずみが、二つの新しい話型、「施身聞偈」型、「盲目の婆羅門」型のシビ王本生譚を生み出してゆく契機となった。

第四章 スタソーマ王本生譚の原型と展開（一）

スタソーマ王説話の展開を論じた渡辺海旭の著名な英語論文（一九〇九年）では、このことを論ずる際の基準は（説話研究においてしばしばそうであるように）話型やモチーフである。しかし、話型やモチーフは説話の主題を変容させる可能性を伴う。『三宝絵』に入ったスタソーマ王本生譚は「持戒波羅蜜」（究極の持戒）を説く体裁を取るが、その主題には整合しない点がある。

第五章 スタソーマ王本生譚の原型と展開(二)

「持戒波羅蜜」を説く説話として『三宝絵』に入ったスタソーマ王本生譚は、本来「真実語」を背景とする、あるいはそれを主張する説話である。スタソーマ王（過去の世の仏）が食人鬼カルマーシャ・パーダを帰依させたその力は、「真実語」、真実を語ることに由来する超自然的威力にあった。

第六章 スタソーマ王本生譚とその思想的背景

古代インドの説話、思想・宗教的教訓の宝庫である『マハーバーラタ』の「真実」「真実語」「真実の誓い」の用例に基づいて、スタソーマ王が生命に賭けてカルマーシャ・パーダとの約束を果たそうとしたその意味、思想的背景を考える。そのとき、この人物の行動が「真実」あるいはそれを口にした「真実語」「真実の誓い」の威力を信ずる世界の者であるがゆえの行動であったことを知る。

第七章 大施太子本生譚の原型と展開

「精進波羅蜜」（仏道を求める究極の努力）を説く『三宝絵』の大施太子本生譚は、「普施商主」型本生譚と「善友太子」型本生譚の二つの話型を二分し接合したものとなっている。「普施商主」型の本生譚は本来「布施」を説くものであったが、その主題は「精進」へと推移した。その動きには「努め励むこと」を教える「マハージャナカ・ジャータカ」がからんでいる。

第八章 大施太子本生譚の誕生

『三宝絵』に入った大施太子本生譚の前半をなす「善友太子型」の本生譚は、本来律の「破僧事」（提婆達多による破僧の因縁）に関わり、「提婆達多は無報恩」を説く。話型と主題の結びつきが非常に強いが、この説話

が、よく似た話型の「普施商主」型の説話と接合して「善友太子」型の説話の主題から解放されたとき、「大施太子本生譚」が誕生した。

<博士論文審査結果>

ジャータカ説話の原型と展開

審査委員 主査 小林信彦

審査委員 副査 米山喜晟

審査委員 副査 梅山秀幸

本論文博士の申請につきましては、昨年十一月の文学研究科委員会で、受け入れが認められ、審査委員として米山と梅山と小林の三名が指名されました。三人の審査委員はただちに作業を始め、本年一月下旬には中間報告を作成しました。そして申請人に出頭してもらって、二月二日の午後二時から試問を行いました。その後、審査委員三名は十分な時間をかけて審議を行い、最終的な審査報告を作成しました。ここでは小林が代表して、まとめて御報告いたします。

申請人の氏名は中村史、年齢は四十一歳。現職は小樽商科大学の教授で、国文学を担当しています。論文の表題は「ジャータカ説話の原型と展開」といいます。ジャータカとはブツダの前世物語のことであり、日本では本生譚と呼ばれます。本論文の筆者は、よく知られているジャータカを取り上げて、それぞれの祖型と考えられるものを想定し、発展の最終段階と考えられる日本説話に至る展開の跡を可能な限り詳細に追跡しようとしています。この点につきまして、先ず梅山の評価を紹介したいと思います。

「中村氏の論文では、平安時代の仏教説話集『三宝絵』に取り上げられた本生譚について、国文学の分野ではこれまでせいぜいその直接の典拠と

なった『法苑珠林』あるいは『大智度論』『六度集経』などとの比較によってしか研究されてこなかったものを、ジャータカを取り上げ、より広い視野から検討しようとする。結論的に言えば、狭い領域で煩瑣な議論を繰り返しながらも、あまり生産的とはいえない国文学の説話研究に一石を投じるものとして貴重な業績であると考えられる。」こういう言葉で、梅山は報告を始めています。

同様の評価は米山からも寄せられ、筆者がジャータカ説話の起源まで溯って、その基本的構造を明らかにしようとしている点、それとともに様々な形のヴァリエーションをも詳細に取り上げてその異同を細部にわたって検討している点に注目しています。さらに米山は、自ら設定した方法論に対応するために周到な準備を行っておくこと、すなわちサンسكريットが読めるように努力してきたことを高く評価しています。

梅山の批評はさらに細部に及び、布施を説くシビ王本生譚である『三宝絵』上巻第一話について、中村が仏教説話以前の形態を辿り、ヒンドゥー世界の王の務めを説く説話であったことを指摘している点に注目します。中村は『大智度論』『六度集経』『大莊嚴論経』『賢愚経』、そしてヒンドゥーの大叙事詩『マハーバーラタ』に現れるシビ王の説話を一つ一つ細かに検討することによって、この複雑なプロセスの全体を論じようとしているのですが、梅山は検証過程の厳密さを高く評価すると共に、主題の変異とともに表現レベルにも変化が生じていることに強い関心を寄せています。

さらに梅山は、中村の論じる『三宝絵』上巻第二話についても、意見を寄せます。ことにスタソーマ本生譚については、渡辺海旭の古典的な論文があり、膨大な資料を基にモチーフの分析がなされています。中村はこの論文を再検討することによって、この話がもともと「真実の言葉」を説くものであったことを明らかにしています。「真実の言葉」とはヴェーダ時代に溯る古いインドの呪法を伝えるものであり、真実には超自然力が宿り、

博士論文の要旨および論文審査結果

万策尽きた時に最後の手段となるという信仰です。さらに上巻第四話は、中村によると、本来は布施を説く話が精進を説く話に移って行きました。この変化プロセスの説明も大いに評価されます。

本論文で『マハーバーラタ』を初めとするサンスクリット文献と『ジャータカ』などのパーリ文献は極めて正確に解説されています。梅山の言うように、ヴァリエントの検証過程は微に入り細を穿って厳密この上なく、従来の研究とは比べようのないほど材料を増やしています。格段に広い視野に立ち、研究の可能性を拡大したという点では高く評価されます。この点では審査に当たった三人には全く異論はありません。中村が提示したジャータカ展開の後付けが従来の研究を凌駕していることは疑いようがなく、審査委員全員は一致して、この度の学位申請は認めるべきであるという結論に達しました。

なお桃山学院大学大学院では、論文博士申請の審査に当たって、慣例により外国語の学力審査をすることになっています。今回は特別に筆記試験をしたわけではありませんが、七十頁に及ぶ膨大な渡辺論文を始め、中村はかなりの数の英語論文を前提に論議を展開しております。それに、二年間にわたってオックスフォードに滞在し、サンスクリットとパーリの厳しい演習に参加しています。また Heinrich Lüders を始めいく人かのドイツ人研究者の論文を使っていますし、文学史に触れる際には Winternitz の *Geschichte der indischen Literatur* を参照しています。したがって、学術活動を行うのに必要な英語とドイツ語の知識を十分に身につけていると判断されます。

審査委員三名はこの度提出された論文を高く評価するとともに、申請人の今後の研究に大きな期待を抱いています。「ただ一つ欲を言えば、興味

深い知見の数々が極めて控えめに淡々と指摘されているに止まり、従来の説との差異が明確に強調されていないことが物足りない」という米山の言葉が我々の気持ちを代弁しています。

オックスフォード留学など、申請人は他の人には得られない機会に恵まれたにもかかわらず、まだ十分にそれを生かしていないのが気になります。今後は出身学会に気兼ねをするのはほどほどにして、他の国文学者たちからの誤解を恐れずに、自分の発見を率直な言葉で堂々と表現するように我々は希望します。この点につきましては、試問の際に我々一人一人が力を込めて強調したところであり、申請人もそれを重く受け止めてくれたと思います。

2006年2月10日

小林信彦 ㊞

米山喜晟 ㊞

梅山秀幸 ㊞